

「父子墓」拾遺

窪島 誠一郎

ついに、というべきか、父水上勉と私の「父子墓」が浄運寺さんに建立されることになった。

檀家の方ならご存知と思うけれども、浄運寺には、すでにお二人の文学者の墓がある。一つは「無明塾」の講師を永くつとめられ、先年亡くなられた作家の中野孝次先生の墓、もう一つは小林覚雄ご住職の従兄弟にあたられる文芸評論家にして、芸術院会員でおられる秋山駿先生（もちろんこちらはご健在！）の墓、私はまだ「作家」のうちでは駆け出しだけれども、実父である水上勉の文名に便乗（？）して、今回父子連名の墓碑を建てさせてもらうことになったのである。

碑面の表には、父「水上勉」、子「窪島誠一郎」の自筆文字。

裏には、「名も無き父子ここに眠る」という明朝文字の一行。

墓石に使われるのは、父の郷里である若狭に近い越前足羽山で採掘された「笏谷石」で、何年前前のこの寺報でも紹介したのだが、住職と二人旅してみつけてきた、淡い緑色の石肌が美しい火山岩だ。今から

一七〇〇万年前の火山活動によって生成された火山灰や火山礫が固まってできた石なのだが、何十年か風雨に打たれると、掘り文字もろともすっかり消えてしまうかもしれない、はなはだ「魅力的な難点」をもっている石なのである。

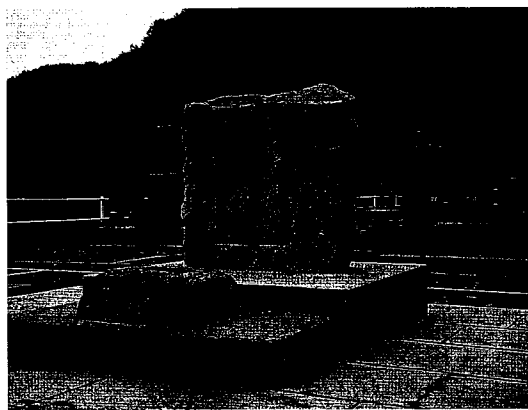
じつは、私はこの「何年か経てばこの世から消える」という笏谷石の潔さにひかれて、今回の「父子墓」の建立を決心したといっているのかもしれない。つまり「墓」は私たち父子にとって、この世に永遠に名をきざみのこすためのものではなく、「この世の生きていた時間」を、私たち自身が確認するためのものだからである。

もっとも、父水上勉は八年前に他界していても、墓の建立者である私はまだこうしてピンピンしているわけだから、今回の父子墓は、私にとって「生前墓」であることに変わりない。

しかし、最近耳にする「樹木葬」とか「散骨葬」といった流行葬をきくと、何となく私たち父子は、この浄運寺での墓建立をいそぎたくな

るのだ。なぜなら、さつきもいったように、私たちの墓は、自らが生きた時間を、共に生きた人とともに確認したいと希っている墓でもあるからである。「樹木葬」も「散骨葬」

もいけれど、人間の魂の本当の落ちつける場所とは、自分を愛し、自分もその人を愛したといきれる人の掌だろう。幸い私は、縁あってこの「浄運寺」というお寺を得、住



父子墓

職を得、墓地を得、たくさんの思い出を得た。「墓」は形であって、肝心なのはその「墓」の建つ場所が、死者にとってどれだけ幸福な歳月を共有してきた場所であるかが問題なのではなからうか。

いうまでもなく、墓におさまる父の遺灰は、父自身が焼いた備前ふうの骨壺に入っている。水上勉ファン

なら、生前父が創作と同じくらい、骨壺づくりに血道をあげていたことはご存知だろう。晩年の父の本「植木鉢の土」にこんな一節がある。

骨壺はつくったが、私は死なないうから、死にたくないから、梅干しや塩昆布でも入れておく器にした。正直に言えば、骨壺はつくったけれど、死を考え、死の支度をし、それを用意することは嫌なのだ。

自分は死なない、不死身である、と信じた。自分にだけは死も遅れてやってくると思いたい。

あまりに正直な父の述懐で、思わず笑ってしまうが、思想だけはバカ息子の私も似ている。

「輪廻転生」も「招魂再生」も真ツ平ごめん、私だって「生前墓」をつくらうと「父子墓」をつくらうと、いつまでも生への未練を断ち切れないういである男なのである。もう一日、もう一日、とあくせくしている男なのである。

しかし、浄運寺に「父子墓」を建立することで、何か一つ、大きな荷を下ろしたようなホッとした気持ちになっっているのはなぜだろう。

（信濃デッサン館「無言館」館主・作家）